

つがるで17年発見、幻の水草

環境省レッドリストの絶滅危惧種に指定され、2017年につがる市内の沼で発見された幻の水草といわれる「ガシャモク」の種を維持し保存活動につなげようと、地元の木造高校の生徒たちが本年度、校内でガシャモクの栽培に挑戦する。

(藤田幸雄)

「ガシャモク」栽培に挑戦

木造高生 地元で保存目指す

つがる市でガシャモクを発見した合同研究グループのメンバーで、弘前大学農学生命科学部白神自然環境研究センターの山岸洋貴助教(44)の指導を受け、生徒

たちは12日、ガシャモクの幼株を大型水槽に沈め、栽培と生育状況の観察を開始した。

山岸助教らが発見したガシャモクは、現存する自然

個体群としては北九州市に次ぐ国内2例目で、それまで関東地方とされていた分布の北限を大きく更新した。同校では2、3年生の総合的な学習の課題として、同市の豊かな自然環境を反映して生息するガシャモクの栽培方法を研究するとともに、自然環境を保全することの大切さについて理解を深めることにした。

この後、生徒たちは正面玄関付近に設置した深さ約60センチの大型水槽に、鉢植えされたガシャモクの幼株2株を静かに沈めた。今後、水槽の水温を調べながら生育状況を定期的に観察し、ガシャモクの性質や成長に必要なものは何かなどを研究する。最終的には種子の生産や育成なども目標に掲げる。また発見された沼の現地訪問も予定している。

3年生の一戸楓華さん(17)は「数少ない貴重な水草が地元で生息しているのはすごいこと。ガシャモクの勉強や観察をしながら絶滅しないよう増やしていきたい」と話した。



山岸助教④からガシャモクの栽培方法について説明を聞く木造高生たち

同日、同校で行われた特別講義には2、3年生11人が参加。山岸助教がガシャモクなど水草の特性を説明した上で、「つがる市内の沼を調査していて、たまたまガシャモクを見つけた。

富栄養化の進行などでガシャモクがそのまま維持できるかは不透明で、保存活動を行う必要がある」などと解説した。



大型水槽に沈めたガシャモクの幼株